

令和5年度の学校運営に関する自己点検・自己評価結果について

津看護専門学校

令和5年度の学校運営に関する様々な取組みについて、本校の自己点検・自己評価委員会により、9つのカテゴリー毎に整理した123の評価の視点をもとに「自己点検・自己評価」を実施しました。

評価は、点数制を用い、その尺度は、「できた。当てはまる。(3点)」、「ある程度できた。ある程度当てはまる。(2点)」、「できなかった。当てはまらない。(1点)」の3区分としました。

令和5年度の評価における「9つのカテゴリー」の「評点結果」及び「主要な評価の項目」と「評価の概要、課題等」は、次のとおりであり、前年度を上回る成果があったものが1カテゴリー、前年度とほぼ同程度の成果であったものが6カテゴリー、前年度の成果よりも下回ったものが2カテゴリーという結果となりました。

前年度の評点を下回った2カテゴリーについて、その理由は、退学者数が前年度を大きく上回ったこと(2名→7名)、令和6年度新入生が定員を大幅に下回ったこと(新入生23名、定員35名)、社会貢献活動の参加学生数が減少したことによるものであり、今後、それらの改善に向けた取組みを着実に進めていきます。

なお、令和5年度の評価の最終的な検討会議の中で、年度毎の評価結果を細かく比較できるように、翌年度(令和6年度)以降の評価は評価尺度を3区分から4区分に変更することとしました。

は評価に当たっての9つのカテゴリー

I 学校運営(評点:2.9) 前年度評点:2.9

(1) 年間目標の設定・管理

- ① 本校の教育理念を踏まえた教育目標に資する教育の方向性として「年間教育方針」を設定し、教員会議において全教員が教育方針の内容及び1年間の結果・成果の評価を共有しました。
- ② 1年間の評価においては、単に○×として振り返るだけではなく、新たに取り組むべきこと、改善していくべきこと等について、全教員間でしっかりと議論しながら評価を行いました。

参考：年間教育方針の行動目標(代表的なもの)

- ・各教員が、教育課程の全体像を把握し科目間の調整を意識しながら、マトリックスの確認を行いつつ科目目標の達成をめざす。
- ・新旧カリキュラムの運用を的確に行うとともに、新カリキュラムの運用に関する評価を実施する。
- ・学生の主体性(目的意識を持って自らで計画・実施できる能力)を育む教育・指導に注力する。
- ・退学や休学となる学生を出さないよう、学校生活全般の状況を把握しながら必要な指導やアドバイス等を行うとともに、学力の低い学生に対して学習方法の改善等を指導する。
- ・1年次からの計画的な国家試験対策を実施して全員合格を達成する。
- ・教員間の授業批評の取組みの継続や積極的な研修参加など、教員の授業・実習指導の実施能力やノウハウの一層の向上に努める。

(2) 学校の独自性の創出

- ① 「少人数教育の実践」が本校の教育面の強み・特色であり、その維持・向上のために令和5年度は、次のような取組みを実施しました。
 - ・各学年の担当教員を担任1名、副担任2名の3名体制とし、学生の学力や学生生活全般の態様に応じたきめ細かな指導・助言を行いました。
 - ・特に、卒業や国家試験の合格が厳しい状況にある学生に対しては、個別講義や演習の追加実施により、充実したサポートを進めました。
- ② なお、令和5年度の看護師国家試験の結果においては、2年ぶりに受験者全員（100%）合格を達成することができました。今後、令和6年度試験に向けては、連続100%合格のスタート年として引き続き対策の継続・強化が必要と考えています。

(3) 教員会議の効率的・効果的な運営

- ① 本校の年間教育方針や教育活動の諸計画の検討において、さらには、それらの展開方法や諸課題への対応策等については、トップダウンではなく、教員会議の場で全教員参加のもとに様々な視点で捉え、アイデアを出し合いながらしっかりと意見交換を行って決定しました。

(会議開催頻度：2回～3回/月)

こうした取組みが、全教員の一体感の醸成と共通認識の徹底につながり、教育面の量的かつ質的な向上に寄与しているものと考えています。
- ② 教員会議は、検討や議論を深めていけるように十分な時間を確保して開催しており、そのために会議開催日程と主要な審議事項を示した「年間開催計画」の作成や会議資料の事前配付の徹底など効率的な会議運営に努めました。
- ③ 会議における議論や決定事項の内容については、教員間の当番制で会議録を作成することにより、検討内容の継続性の確保と今後の検討事項への活用が可能となるようにしています。

II 教育課程・教育活動（評点：3.0）前年度評点：2.9

(1) 教育活動に関する目標設定と達成結果の分析

- ① 各教員の教育目標については、本校の看護教員ラダー（※）に基づく年間目標や学校全体の教育力の向上等に資する目標を設定し、それらの進捗状況を確認しながら、結果の評価を行いました。なお、評価に当たっては、副校長、教務主任と本人による三者面談を実施し、結果の共有を図っています。

※看護教員ラダー：教員が段階的に能力向上していくための内容及びレベルを示すもの

参考：各教員の教育目標（主なもの）

- ・全ての学生が単位修得、卒業試験・国家試験の合格を達成できるよう、主担任・副担任の連携協力体制を維持・向上させる。
- ・新カリキュラムの運用に関する評価を実施する。
- ・授業を進めていくにあたっては、学生にとって指導の目的や主旨が分かりやすいことを重視し多方面からの工夫や改善も行いながら取り組む。
- ・学生個人を尊重した指導、学生の主体性を育む指導、学生の次の行動につながる指導を心がける。
- ・まっすぐに対等な目線で学生に向き合いながら、しっかりと観察し、積極的にコミュニケーションをとって効果的な指導・助言を行っていく。
- ・授業アンケートの結果を基に自己の授業を振り返り、質的向上を図る。
- ・新任教員に対して適切なサポートを行う。
- ・臨床研修への積極的な参加により専門性を一層向上させる。
- ・オンラインセミナーの活用も図りながら、各種学会やセミナー等へ積極的に参加することにより最新情報を基にした学びを深め、授業に活かしていく。
- ・研究論文をまとめ看護研究発表会で発表する。
- ・定員を満たす学生数が確保できるよう、学校の魅力を積極的かつ細やかにPRしていく。

② さらに、教員毎の目標設定に加えて、「年間教育方針」を踏まえた

ア) カリキュラム内容や教育面で重要視する視点などを反映させた「学年毎の取組目標」の設定

イ) 実習調整・教育課程・入試対策・教育物品の管理・図書・健康管理など教員が業務分野毎に編成している「係」等による「目的・役割毎の取組目標」の設定や計画策定を行い、学校運営全般にわたってもれなく対応できる仕組みとして運用しています。

③ これらの目標や計画の達成結果については、年度末に、関係教員による評価を行ったうえで、教員会議の場で全教員により最終評価を行うという二段階評価を実施して様々な改善活動や翌年度の目標設定・計画策定につなげているところであり、令和5年度は、年度当初に設定した目標や活動計画について、概ね達成することができました。

④ なお、現行目標は、定性的なものが多く、第三者による評価など客観的な評価になじみにくい面もあることから、その改善策として数値目標の導入について検討を行い、合計18の目標を設定して令和6年度から新たに加える評価手法として位置づけました。

参考：令和6年度以降の評価に活用する数値目標（代表的なもの）

看護師国家試験合格率、卒業生の看護職としての就職率、中途退学者数（年間）、本校に対する当該年度卒業生の満足度、学生の講義・実習満足度、オープンキャンパス参加者数、教員の研修受講者数、新入生入学者数、ホームページアクセス数（年間）など

(2) 教育課程及びシラバス（授業計画）の妥当性

- ① 令和5年度は、1・2年生が新カリキュラム、3年生が旧カリキュラムを適用することを基本とするなど、新旧カリキュラムが混在する中で円滑に教育活動を進めることが必要となりましたが、大きな問題もなく、当初の計画どおりに運用することができました。
- ② シラバスについては、国家試験の出題基準に見合ったものになっているか、授業の内容と一致しているかなど、様々な視点により整理を行うとともに、学生の意見・反応を踏まえた見直しも行いながら策定・運用しました。

(3) 授業内容・指導方法の評価と工夫

- ① 授業内容や指導方法については、学生に対するアンケートや教員相互の授業批評（本校での呼称：授業研究）等も行いながら、より効果的に授業や実習が進められるように取り組みました。
- ② 学生アンケートでは、教育活動等に関する満足度合いを4段階評価で確認し、さらに、良かった点や不足している点などを自由記述式で詳細に確認しました。
このアンケート結果は、専任教員だけでなく、外部講師や実習指導者とも共有しながら、今後の教育等の参考として活用しています。

(4) 実習における学習環境や指導体制の妥当性及びインシデントの把握と原因分析

- ① 実習については、実習先の指導者（実習指導者）と教員が十分に意思疎通し共通の視点で学生に対応できるよう、臨床指導者会議への参加、実習指導者への学生意見等の情報提供、教員間の定期的な情報交換を行うとともに、実習時に生じたインシデントの把握・分析や再発防止策の検討を行いました。
- ② インシデントの再発防止策の検討結果については、シミュレーション演習や技術練習など校内での学生指導にも反映させるなど、学生の能力向上につなげることができました。

Ⅲ 入学・卒業対策（評点：2.8）前年度評点：2.9

(1) 入学生の確保

- ① 少子化の進展など厳しい環境の中で本校の定員35名（一学年）の入学生を確保できるよう、全教職員による様々な取組みを展開してきましたが、令和5年度受験者数・入学者数は39名・23名と、前年度の数（65名・33名）を大きく下回る結果となりました。
こうした状況を踏まえ、令和6年5月以降に公表される「他校における学生の確保結果」も確認したうえで、各高等学校を訪問して令和7年度の進学希望状況等も把握しながら必要な対策を検討していきたいと考えています。

参考：入学生確保のための主な取組

- 高等学校への個別訪問
- 来校型・Web型双方のオープンキャンパスの実施
- 高等学校の進路指導教員を対象とした学校説明会の開催
- 各種の進路ガイダンスへの参加
- 高校生・社会人による個別見学の受入れ など

(2) 中途退学の防止対策

① 中途退学者を一人でも少なくしていくことや、そのための対策の実施について、教務主任の年間行動目標の1つとして位置づけて取り組みました。具体的には、各学生の学校生活全般をメンタル面も含めて教育的視点で観察し、必要と考えられるタイミングで教員がきめ細やかに関わっていくこと、学力の低い学生に学習方法の指導・助言を行うこと、必要と考えられる場合にはスクールカウンセラーのアドバイスも得ながら対処していくことなどを徹底・実践しました。

② しかし、こうした取組みにもかかわらず、令和5年度の退学者数は7名と、令和4年度の2名を大きく上回る結果となりました。

退学者7名のうち1年生が5名で、1年生のうち3名が前期の早い段階で退学しているなど、看護師をめざしてしっかりと勉学に励むことが必要となる環境に入学当初からなじめなかったことが大きな要因であると考えられ、教員によるきめ細かな対応にも限界があることを痛切に感じた1年ではありました。

今後も、各学生の特性・特徴を十分に踏まえながら、指導・サポートを継続していきたいと考えています。

(3) 看護師国家試験対策と成果

① 1年次からの国家試験対策の実施と受験者全員合格を教務主任の年間行動目標の1つとして位置づけるとともに、「国家試験対策 年間実施計画」を策定し、学年毎の学習計画や対策授業、外部講師を活用した講義、複数の実施主体による模擬試験等をスケジュールリングし、もれなく継続的に対策を講じました。

② こうした対策の結果、令和5年度は受験者全員（100%）合格を達成することができました。また、昨年度に残念な結果であった卒業生についても、継続的なサポートを行った結果、令和5年度の合格を得ることができました。

IV 学生生活への支援（評点：3.0）前年度評点：3.0

(1) 心身の健康管理への支援

① 中途退学者対策の一環でもある、各学生の学校生活全般をメンタル面も含めて教育的視点で観察し必要と考えられるタイミングで教員が関わっていくことや、スクールカウンセラーの配置、常日頃からの学生との十分なコミュニケーションなどを実施する中で、健康管理面においても必要な指導・助言・支援を行ってきました。

② また、令和5年度は、新型コロナウイルス感染症が感染症法の5類へ移行し、全国的な対策の緩和が図られた中ではありましたが、一定程度の感染者の発生が引き続き、さらにはインフルエンザの流行も相まって、校内及び実習現場における感染予防・拡大防止対策の徹底が引き続き必要となりました。

こうした状況の中、毎日の体温測定や健康状態の把握とともに、休校措置や学級閉鎖の実施など、適切なタイミングで有効な対策を継続して講じました。

(2) 学生の自主的な活動に対する支援

- ① 例年と同様に、校内の学生で構成する「自治会」によるレクリエーションをはじめとする様々な活動の場所の提供や授業時間割上の配慮等に努めました。
- ② 学生が各自で行うボランティア活動等を支援・促進するため、献血活動や難病への理解を深める取組に関する情報提供を行うとともに、関連する機関（血液センター）への見学会を実施しました。

V 管理運営・財政（評点：3.0）前年度評点：3.0

(1) 適正な予算執行、予算管理

- ① 本校の予算執行においては、教職員が経費節減に関する十分な理解・認識のもと日常の教育活動、事務業務、施設・設備管理を進めました。
- ② また、今後の収支状況の一定の改善に向け、授業料、学校運営協力金及び寮費の令和6年度入学生からの増額について周知を図るとともに、バス通学をする全学生を対象とした「通学バス運営負担金」の徴収について在校生及び保護者の方への理解を求めるなど、令和6年度からの実施に向けた取組みを進めました。

(2) 危機管理の徹底

- ① 毎年度実施している校内の消防・防災訓練について、令和5年度は11月に開催し、津市消防本部職員の方々の指導による消火器を用いた初期消火訓練、大規模地震の避難訓練、県防災対策部の地震体験車による地震体験と同部職員の方による地震防災の講話を実施し、学生の防災意識の向上に努めました。
- ② 大規模地震や大規模な風水害に備えるため、校内の備蓄物資の点検・補充を行うとともに、緊急避難セット（水・非常食や衛生用品などが入っているリュック）を全校生徒及び全教職員が保有するよう、新入生に追加配付を行いました。

VI 施設・設備（評点：3.0）前年度評点：3.0

(1) 施設・設備の点検とメンテナンス

- ① 校内の水道設備、電気設備、消防設備、浄化槽については、関係法令に基づく専門業者による定期点検及び老朽箇所・不具合の補修等により、安全性・利便性の維持に努めました。

(2) 適切な教材、図書の確保と活用

- ① 看護実習室・情報科学室・視聴覚教材室の備品・機材の点検・交換等を定期的（年2回）に実施するとともに、実習用品の交換・配置数の見直し等を行い、実習や演習が確実かつ円滑に実施できる環境づくりに努めました。
- ② 図書室の図書については、司書職員に加え学生図書委員（1・2年生8名）を選任し、円滑に貸出ができる態勢を整えました。また、計画的に図書の購入を行うとともに、掲示板への新刊案内の掲示や貸出の多い図書・おすすめ図書の紹介など情報提供の充実に努めました。

VII 教職員の育成（評点：3.0）前年度評点：3.0

（1）職場内研修の実施

- ① 職場内研修については、教員会議における教員間の意見交換が、気づきを得て各自の教育力を高めていくための研修機会でもありととらえており、令和5年度は2～3回／月のペースで開催しました。
- ② 教員会議に加え、教員と学生間のコミュニケーション上の問題点等を事例毎に議論し、その解消方法を検討する「倫理カンファレンス」を実施するとともに、特定の教員の授業内容を他の複数教員が確認し、教える手法や内容に関して大変良いと思われたこと、一層向上させていくべきこと、配慮や追加を行った方が良いと思われることなどを授業終了後に話し合う「授業批評（本校での呼称：授業研究）」を実施し、教員の教育力の一層の向上及び授業内容の充実につなげました。

（2）校外研修・臨床看護研修への参加と研究活動の実施

- ① 令和5年度の現場研修としては、医療機関や福祉施設（病院、訪問看護ステーション、市が運営する保健センター、特別養護老人ホーム、介護老人保健施設等）において5名の教員が計7回（1回当たり1～4日）の研修を受け、研修後に校内報告会を開催して教員間で成果を共有するなど、看護の専門性の一層の向上に努めました。
- ② 現場研修以外の校外研修については、オンラインでの受講が可能なものに参加し、全ての教員が研修を受講して各自の教育力の向上に努めました。
- ③ 教員による独自の研究活動として、「訪問看護実習における看護学生の気づきの分析と今後の課題」をテーマとした研究を実施し、本校を運営する法人（暁純会）により年1回開催される看護研究発表会において発表を行いました。

VIII 広報（評点：3.0）前年度評点：3.0

（1）積極的な情報提供

- ① 本校の対外的な情報提供手段としては、パンフレット等の印刷物やホームページ・Instagramによる情報発信によっており、令和5年度は、作成後10年が経過する学校ホームページの改修のための作業に着手しました。（令和6年度完成予定）

IX 地域との連携（評点：2.5）前年度評点：3.0

（1）地域内や学校周辺での社会貢献活動

- ① 令和5年度は、例年と同様に、学校周辺の清掃活動を行うとともに、学生による献血や難病への理解を促進するための取組を行いました。

- ② 献血は、医療人を志す本校学生に関連のあるボランティア活動でもあり、教員が全学生に対して献血の重要性を理解させながら、県の啓発事業「ヤングミドナサポーター（啓発活動を行うボランティア）の募集」についての情報提供を行うとともに、1年生による三重県赤十字血液センターの見学会を実施し、令和5年度は2名の学生がヤングミドナサポーターとして活動し、6名の学生が献血の申込みを行いました。
- ③ 難病への理解促進については、三重県難病相談支援センターが毎年実施している「サマースクール」に学生1名が参加し、難病に関する制度や具体的な疾病に関する知識の習得とともに、難病患者や家族の方々との交流など貴重な体験をさせることができました。
- ④ 本校は、市街地から離れているという立地条件のため、大半の学生がスクールバスで一斉に登下校するという通学方法によっており、学生による授業終了後の積極的な活動を促しにくい側面がありますが、今後も学生の一体感を醸成しながら、自主的活動が一層活発化するよう支援を行っていきたいと考えています。